

城を歩く会12月定例会「市川城と船橋宿を歩く」ご案内資料①

日時＝ 平成18年12月15日(金曜日＝予備日22日) JR市川駅10時集合

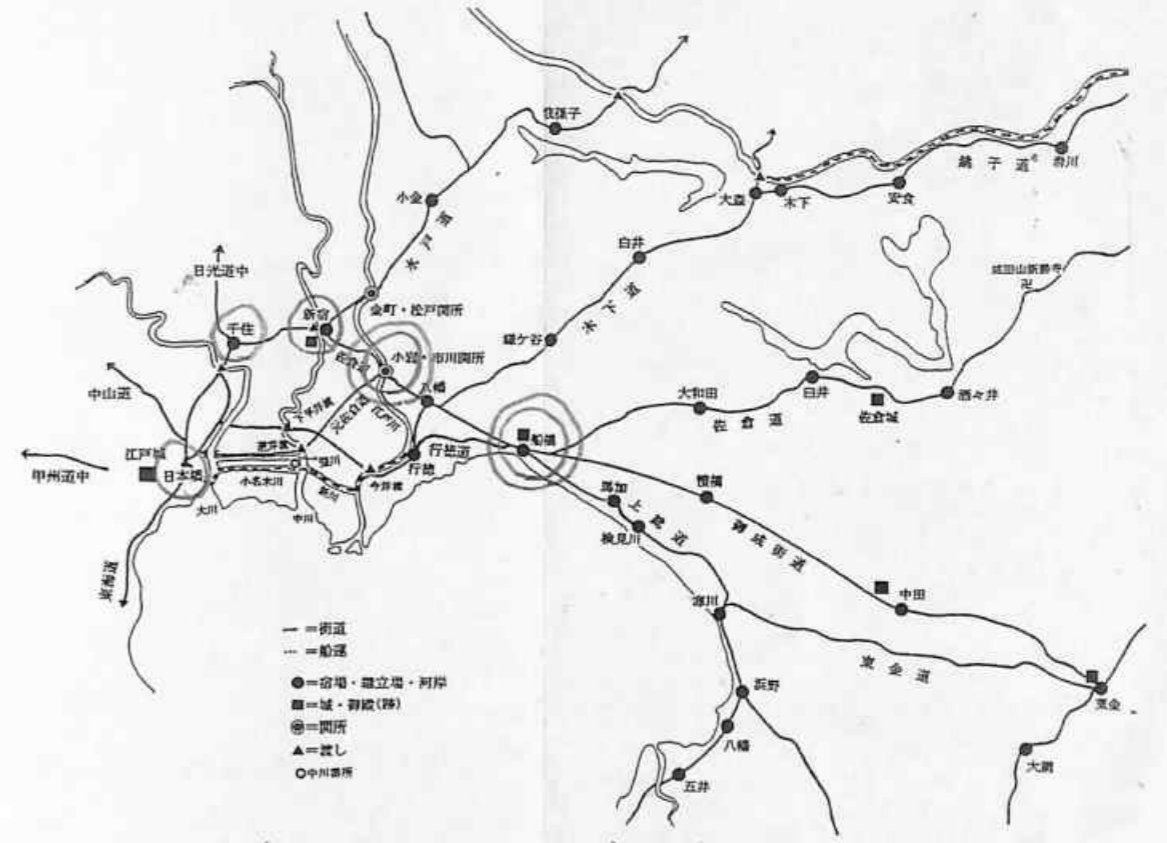
主要行程＝ 駅、市川の渡し跡、市川城跡、手児奈霊堂(昼食)  
 京成真間駅乗車(電車移動＝各駅9分およそ15分) 大神宮下車  
 駅、旧海岸跡、船橋大神宮、海老川橋、船橋東照宮、船橋御殿跡、  
 旧成田街道船橋宿、船橋行在所跡、JR船橋駅16時30分ころ解散

山岸弘明

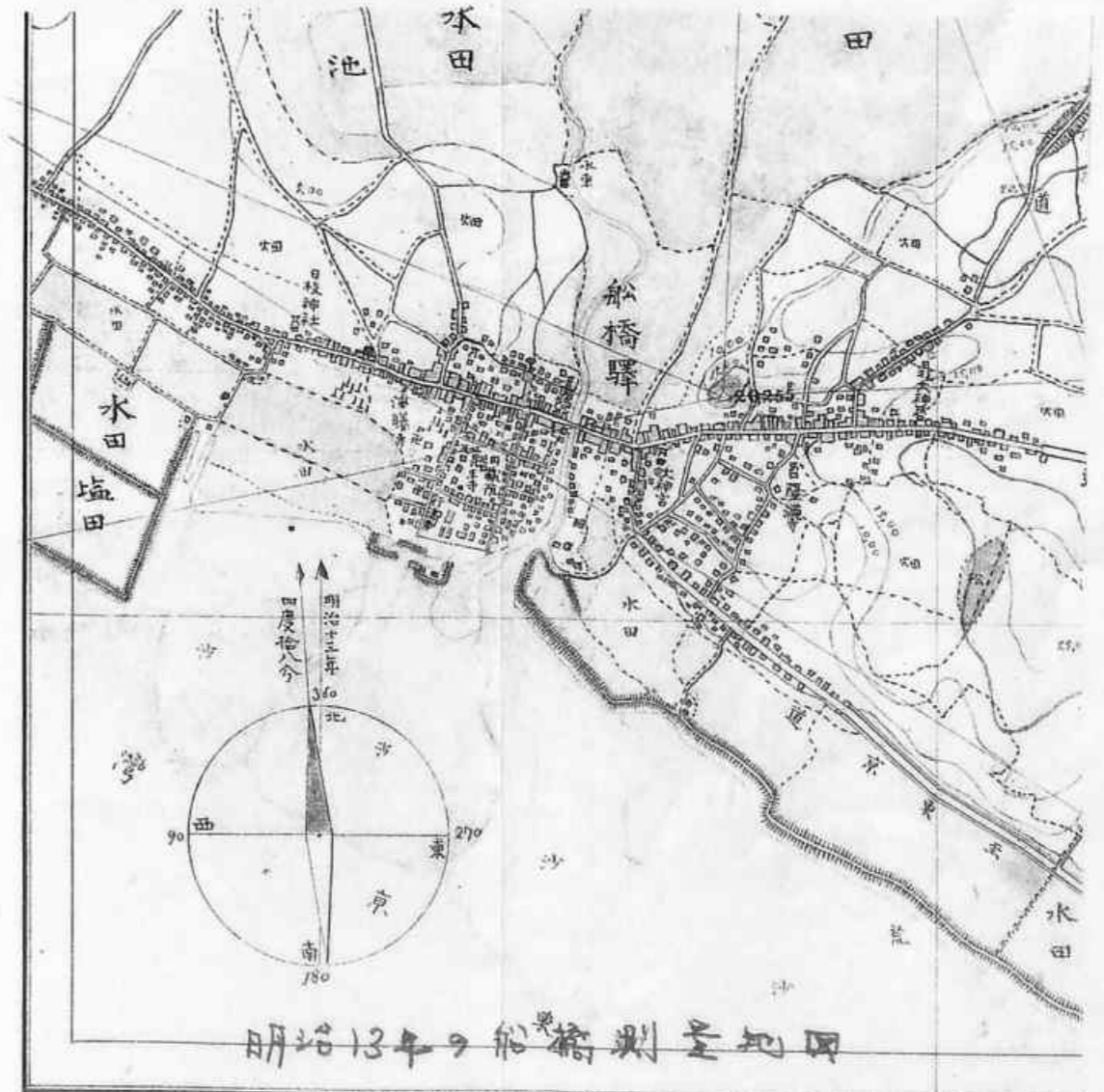
市川と船橋の案内コース

この案内コースは、JR市川駅を起点として、市川城跡、手児奈霊堂、真間山弘法寺、そして船橋方面へと進むルートを示しています。主要な見どころや文化財は以下の通りです。

- 7 真間山弘法寺**: 富安風生の句、伏姫桜、水原秋櫻子の句、小林一茶の句、水戸黄門が名付けた茶室「道寛亭」、涙石、かつて弘法寺の参詣者で賑わった茶屋の跡。
- 3 手児奈霊堂**: 吉田冬葉の句、真間の入り江の名残りの池、真間小学校、山部赤人の歌。
- 9 文学の道**: 水原秋櫻子(俳句)、幸田露伴(小説)、吉田冬葉(俳句)、永井荷風(小説)、万葉集、松本千代二(短歌)、三島由紀夫(小説)、阪井久良俊(川柳)、富安風生(俳句)、北原白秋(詩・短歌)、能村豊四郎(俳句)、相田みつを(ギャブリー)。
- 12 中野孝次小説**、**13 井上ひさし小説**、**14 山手樹太郎小説**、**15 宗左近小説**。
- 11**: 味のある建物がいっぱい!
- 10**: 市川の書家による万葉の歌のパネルが民家の壁に!
- 8**: 万葉の音、真間一帯は入り江だった!
- 6**: 昔の大門通りを描いたタイル壁画がある。
- 5**: ジャズの店も多い。
- 4**: 伝手説児奈 (伝説の人物に関する説明)
- 2**: 市川公民館、市川公園、須和田公園、郭沫若、別須和田の碑。
- 1**: 京成電鉄、JR市川駅、市川真間駅。



房総地方の宿場図



### 午前中=市川を歩く

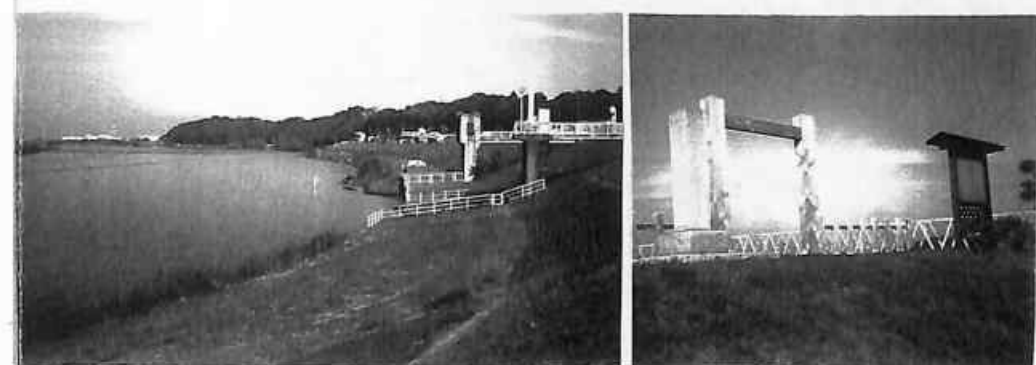
- 1) はじめに地名の由来から
  - ① 市川=国がの市場、大河江戸川に由来とも。南北朝から見える地名という。
  - ② 真間=弘法寺の山号真間山(別称真間御坊)にちなむとする。奈良時代からの地名で美女・真間の手児奈の名は都にも知られ、「万葉集」にも多く登場する。
- 2) 成田佐倉道間(あい)の宿・市川村
  - ① 市川は房総3国、常陸と江戸を結び、江戸川の関所を控えた交通要衝だが、江戸時代は成田街道の八幡宿(市川)と葛飾新宿(にいじゅく)の間(あい)の宿で宿場を名乗ることはできなかった。
  - ② 江戸後期市川を通過した大名家は佐倉堀田藩、多古松平藩、生実森川藩、小見川内田藩、久留里黒田藩、五井有馬藩、大多喜松平藩、飯野保科藩、佐貫阿部藩などであった。大名たちは規定の供揃えを従えて半年交代で江戸と国元を往復した。
  - ③ 村高およそ1千石、幕府直轄領、弘法寺領、旗本大久保知行所の3給で、江戸川渡船場から八幡宿への村内往還は640間、戸数230軒、人口1,129人、1人あたりGNPはおよそ1石弱であった。村人たちは米、野菜のほか梨を栽培し、魚を取り、渡船場や年貢津出し、継立て人足などで生計を立てた。
  - ④ 旧往還(成田佐倉道)の町並みは6町半(およそ700m)、市川橋近くで右折して江戸川土手に出た。
- 3) JR市川駅をスタート、まずは江戸川、市川橋めざす
  - ① 駅前ロータリーを50mほど直進すると市川駅前交差点に出る。かつての成田佐倉道だがいまは千葉街道と呼ぶ。右へ千葉、左折して江戸川、市川橋方向へ。旧市川村のほぼ中心地。道の両側に百姓家が並んだ。旅籠は1軒、富田屋は戦前まで続いたという。
  - ② 間もなく大門通り「弘法寺参道」の碑、進めば手児奈堂、弘法寺へ。商店街は「万葉通り」ともいう。
  - ③ 市川公民館に大きな江戸後期?市川周辺タイル絵「利根川東岸一覽」、地形ときょうのコースを確認する。
  - ④ 胡録神社=市川村の鎮守、こま犬、石灯籠寄進者に名字ざらり。教科書で習った庶民の名字は明治からは誤り、正式に名乗ることが許されなかっただけ。
- 4) 小春日和なら絶景、悪ければ寒さ厳しい。江戸川土手から対岸の小岩や国府台を遠望
  - ① 江戸川=古くは太井(ふとい)川、はじめ渡良瀬川の支流だが、江戸はじめの利根川東遷(4ページ参照)で利根川の本流をへて支流とした。正式名は江戸川だが、古利根川または単に利根川とも言った。江戸から明治大正時代は関東奥地から江戸(東京)に通ずる水上輸送路で高瀬船が行き来した。
  - ② 美しい江戸川の川面を展望。師走の川風が気にかかる。左側の市川橋は昭和2年の架橋、右前方は京成本線、先に国府台地が広がる。
  - ③ 山崎パン駐車場=終戦直後の昭和23年市川で創業したパンメーカー、真間駅近くで開業、配給統制の時代「小麦粉とでき上がったパンと交換」で人気、いまナショナルブランドとして全国に展開、市川駅前「サンプラザ35」が本拠。この地はまた、織豊時代の天正2年創業と伝えられる「上星」醤油店跡、天保11年「醤油番付」の前頭上位に「市川釜屋喜兵衛」がランクされている。



↑市川駅 ↓利根川東岸一覽 ↑十束所迄 ↓釜屋醤油



- 5) 「入り鉄砲に出女」番士が厳めしく固めた市川の渡し(小岩川関所)跡
  - ① 江戸時代は戦略上、大きな川に橋を架けず、船や徒歩で渡河させた。江戸川には16の定船場が置かれたが、とくに交通要衝の市川の渡しには関所も設置された。
  - ② 小岩、市川関所=対岸に川関所、建物は10坪ほど、出入り口に木戸門を設け、厳めしく門を固めた。番士は幕府御家人の中根、田中、川村、黒佐の4家が代々世襲、役料はあわせて23石であった。
  - ③ 江戸川の渡船は市川村が差配した。船頭は10人、市川側の川原に番小屋1軒を立てた。渡船は明け6つ(6時ころ)から暮れ6つ(18時ころ)。豪風雨の時船止め、あざむいて関所を通ったり関所を避けて川越しすることは関所破りで重罪になった。
  - ④ 通行手形=庶民は村名主が発行した通行保証書を所持して旅行した。市川小岩関所の取り調べは比較的緩やかだったが、「入り鉄砲に出女」武器と女性の出入りは厳しく取り締まった。
  - ⑤ 市川関所跡史跡看板に詳細解説と「江戸名所図会」から渡し口と関所図。
  - ⑥ 慶応4年閏4月、江戸開城に反対する旧幕歩兵奉行大鳥圭介を隊長とする幕府脱走兵と新政府軍の間で「市川・船橋戦争」。緒戦は旧幕軍が優勢で弘法寺に入るが逆襲され、市川村の中心地127軒が戦火にまみれた。
- 6) 市川城(弘法寺)=大森会長担当(別資料参照)
 参考=越前系前橋10万石松平家墓所=大名らしい重厚さと気品備える
  - ① 松平直基=徳川家康2男松平秀康の5男、越前勝山、大野、山形をへて姫路15万石 仏性院殿鉄関了無大居士、従四位下侍従兼行松平大和守源朝臣直基(駒形およそ4m=慶安元年)
    - (1)直基の生母(松平秀康側室)= 品量院殿妙愛日覚大姉尼逆修、阿波国主三次越後守長虎息女松平大和守直基之母公(〃=慶安元年)
    - (2)直基の側室(2代直矩側室、堀氏)=永寿院殿妙常珠大姉(〃=万治3年)
  - ② 直基は姫路移封直後の慶安元年、江戸藩邸で逝去45才。いったん足柄市の最乗寺に埋葬後、姫路市の円教寺移葬。供養塔か。生母墓は逆修(生前墓)、この地にどんなゆかりあるのだろうか。



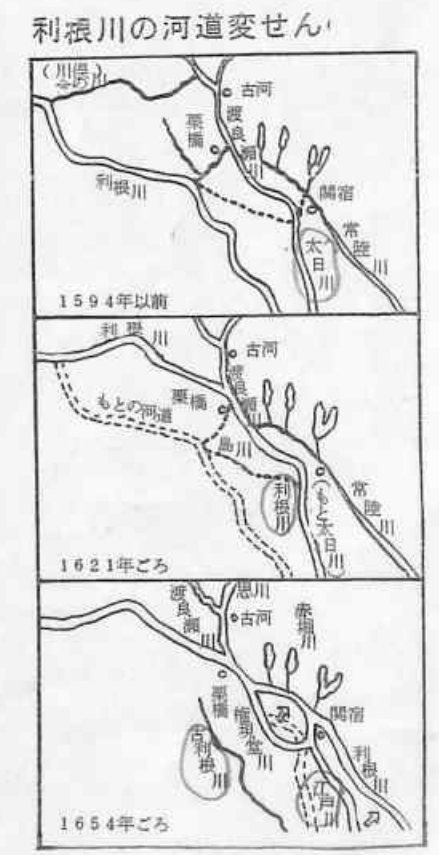
↑江戸川 ↓市川関所跡 ↓↑



↓弘法寺



松平氏の屋



↓英町川



7) 「万葉集」と「手児奈伝説」の地を楽しむ(昼食=集合時間厳守)

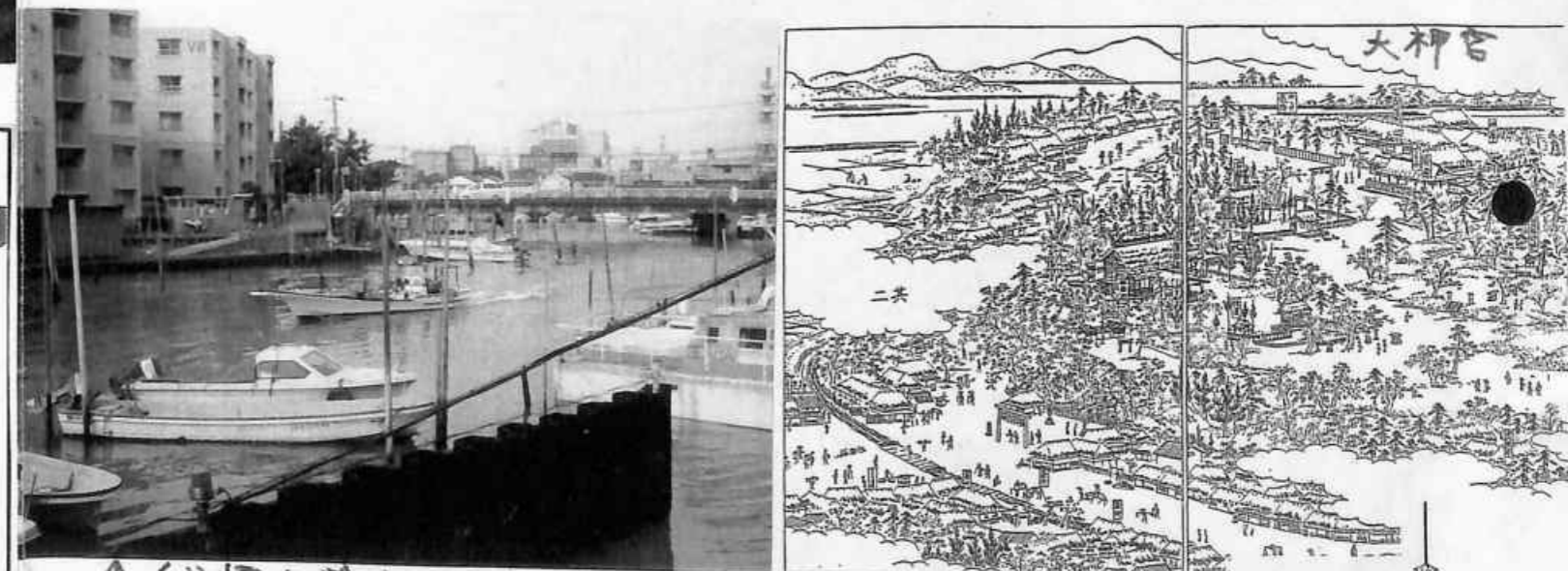
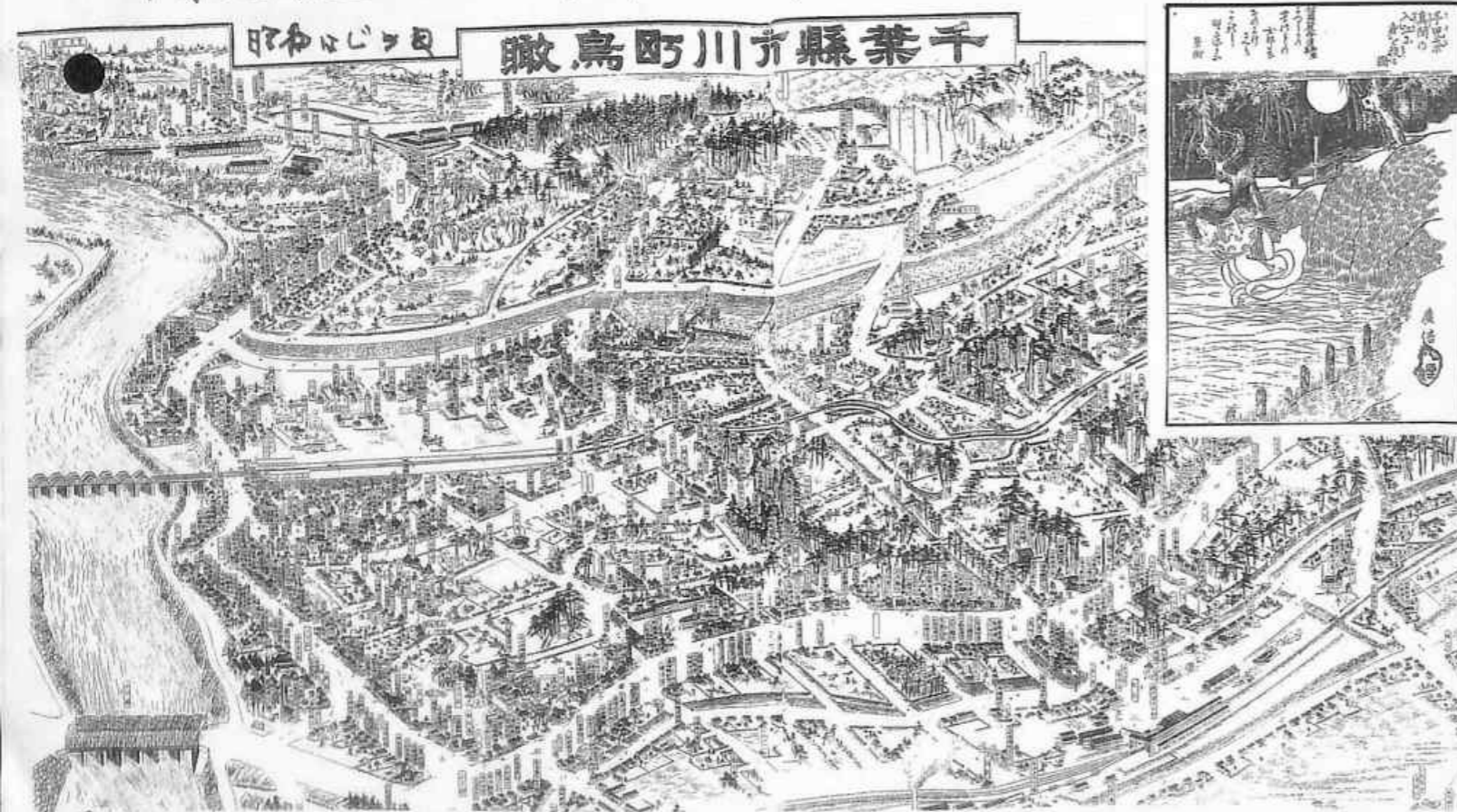
- ① 「手児奈伝説」の里=真間は古くから「万葉集」に歌われ、「新古今和歌集」の藤原定家も熱烈なファンだった。ゆったりとした「万葉の里」を楽しむ。
  - ② 亀井院の真間の井=海に面した真間の境界で唯一飲料水として利用できたのがこの井戸だった。手児奈も毎日ここへ水汲みにきて、その美しさが評判になる。(物語の発端)  
勝鹿(葛飾)の真間の井見れば立ちならし  
水汲ましけむ手児奈し思ほゆ(高橋虫麻呂=万葉集巻9)
  - ③ 真間の継橋=真間の入り江にはたくさんの砂州があった。その洲と洲を結んで継橋がかけられていた。この橋を手児奈に会いたい男たちが通ったとされる。  
足(あ)の音せず行かむ駒もが葛飾の  
真間の継橋やまず通はむ(読人不詳=万葉集巻9)
  - ④ 手児奈霊堂=わが身をめぐる争いを嘆いた手児奈は真間の入り江に入水する。  
われも見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児奈が奥津城(おくつき)どころ(山部赤人=万葉集巻3)
  - ⑤ 手児奈霊堂周辺で昼食  
食堂利用者は大門通りを「京成真間駅」方向へ。真間駅改札口集合(手児奈霊堂集合時間15分後)
- 8) 真間の入り江が真間川に変わる、かつて大変な暴れ川だった
- ① 周辺はかつて入り江、江戸時代のころ段々干上がって葦の群生する沼地、やがて1本の真間川になった。大変な暴れ川で護岸工事が行われたつい近年まで大雨の都度洪水の被害が絶えなかった。春は兩岸の桜並木に家族連れの花見客が賑わう。
  - ② 葛飾の真間の浦廻(み)を漕ぐ船の  
船人さわぐ波立つらしも(読人不詳=万葉集巻14)
- 9) 京成真間駅(電車移動=各駅9駅およそ15分)大神宮下車

午後=船橋を歩く

- 1) はじめに地名の由来から
  - ① 船橋=海老川の船橋に由来(後出)
  - ② 宮本=江戸時代は五日市村、室町時代の五日市にちなむ。明治に改称、大神宮の宮本から
  - ③ 本町=江戸時代は九日市村、九日市にちなむ。明治に改称、船橋の中心地の意味
- 2) 旧船橋海岸、海水浴場跡を遠望……わずかに潮の香りが漂う
  - ① 大神宮駅で下車、徒歩3、4分で旧船橋浦、海水浴場跡へ。
  - ① むかしは海水が干満する遠浅の砂浜が1kmほど続いた。戦前、戦後は海水浴場、潮干狩り場として賑わった。昭和30年代はじめに埋め立て船橋ヘルスセンター(現ララポート)、船橋競馬場、船橋オートレース場、高層マンション街などになっている。
  - ② 海老川河口周辺の運河=千葉港、葛南港を通じ東京湾につながっている。流れは干潮時は真水、満潮時は海水が流れる。
- 3) 上総諸藩の大名行列も通った房総往還上総道
  - ① かつての旧道は船橋海岸前で直角に曲がって千葉方面へ。1kmほど手前の大神宮前追分から始まった房総往還、地元では上総道また千葉道といった。大多喜、久留里藩などの大名行列が行き来した。
  - ② 江戸時代は五日市村、船橋宿を構成した3村の1つで字本宿、横宿など、村高1千石、たんぼ、畑ほぼ同数、人口は384軒、1,765人、村人は半農半漁、年貢米の津出しは裏の海老河岸から船積みした。
- 4) 船橋宿の鎮守・大神宮(意富比神社)と氏子漁師寄進の灯台
  - ① 船橋地区最大の鎮守。大神宮は通称で正式にはおおいの神社という。社伝は日本武尊東征のおり、海中の鏡を発見して祀ったとする。徳川家康から朱印50石を拝領、内宮、外宮のほか、東照宮、神楽殿、絵馬殿、斎殿などを連ねたという。とくに漁師の信仰が厚く漁獲をまず神前に供えた。
  - ② 毎年10月の大祭は「だらだら祭」で知られる。昔は近郷の村々からの見物者で賑わった。家康が近所のこどもたちに相撲を取らせたという故事にちなんでいまも素人相撲が開かれる。
  - ③ 地元漁師が寄進した明治前期の灯台(灯明台=県指定文化財)
    - (1) 明治13年建立。おおいの神社の灯明と漁師の航路目標を兼ねた和洋折衷灯台。標高12mの丘上に立地、江戸時代はこの神社が航行の目印で夜も灯台代わりの常夜灯を灯した。
    - (2) よくみえないが木造瓦葺き3階高さ12m、3階部分は六角形で光源はランプ、反射板はずとという。年1回、1月14日の「灯明台祭り」に点灯する。
    - (3) 日本最初の近代的洋式灯台は明治2年観音崎、以後犬吠埼、野島崎が続いた。



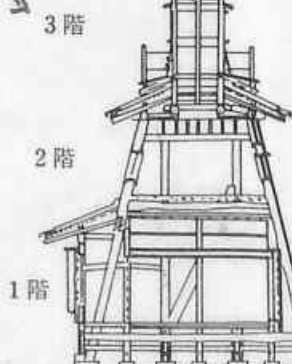
↑手児奈霊堂    ↑真間の井    ↑継橋    ↓手児奈の入水



↑船橋海岸跡 ↓大神宮



灯明台 ↓



5) 明治維新の船橋戦争はメインストリートを焼き払った

- ① 慶応4年の市川、船橋戦争（前出）では義軍府、さっ兵隊の第1大隊（先鋒）江原鑄三郎およそ400人が船橋に進み、ついで第2大隊の堀岩太郎も上総八幡から合流、大神宮を本拠に分宿した。一方の新政府軍の先鋒は岡山軍で市川の八幡宿に入った。
- ② 戦いは閏4月1日早朝から始まる。はじめ旧幕軍が優勢で江戸川まで攻め入るが薩摩軍が駆けつけると形勢が逆転して、薩摩の佐土原軍が船橋に突入した。新政府軍は大神宮を目がけて大砲を打ちこむと境内は炎に包まれ、船橋宿は火の海となった。焼失家屋783軒、両軍の死者37人を数えた。

6) 成田佐倉道から上総道が分岐、大神宮下の追分

- ① 成田佐倉道は大神宮下の三叉路（追分道）を東へ直進、しばらくして東金街道が分岐した。佐倉の堀田藩参勤交代路で庶民も成田詣に利用した。
- ② 上総道（千葉道）はここが起点となる。

7) 海老川を中心に発展、船橋（海老川橋、長寿の橋）が地名に

- ① 船橋宿の中央部を流れる海老川。船橋はこの川岸を中核に発達したといえる。
- ② 川は旧五日市村と九日市村の境界、両村は室町時代から市がたち、地方経済の中心地として発展した。川の両岸は海老河岸で年貢米の津出しや商いを行なう船問屋や漁師家が並んだ。
- ③ 船橋など内房沿岸の漁業権は関西からの移住した人たちが独占していた。船橋浦も将軍家に献上する御菜浦とされたが、元禄年間の大地震以降は魚が取れず貝中心となった。
- ④ 地名の由来となった船橋=海老川に船を並べた船橋、または橋から乗船したことに由来するという。橋欄干に由来をのししたレリーフや船橋の歴史が記されている。
- ⑤ 橋名の別称を海老川橋、また長寿の橋ともいう。なんといい名前のことか。

8) 飢饉に備えた郷蔵と御殿通り

- ① 船橋から少し入った小路を「御殿通り」という。この道の先が徳川家康ゆかりの船橋御殿跡になる。
- ② 旧九日市村郷蔵跡=郷蔵は年貢米の保管や凶作に備えた共同の穀倉をいう。教育委員会史跡表示によれば江戸初期の寛永終りから正保はじめに建造されたが、150年後の寛政3年に津波流失、以後再建はなく備蓄米は名主が管理した。
- ③ 御蔵稲荷の由来と感謝の碑=寛政3年郷蔵流失跡地に創建。祭神は土地と食物の神様という。碑文は海老川が毎年のように氾濫し、この社殿が避難所と焚き出し所として役立ったことなどを記している。

8) 徳川家康も鷹狩りに泊まった船橋御殿跡に小さな東照宮

- ① 江戸はじめの元和元年、徳川家康が佐倉城主の土井利勝に命じて上総東金、佐倉地区での狩猟用に作らせた御成街道の宿泊御殿、同時に千葉御成り御殿と東金御殿も造営された。利勝は道沿いの村々に突貫工事を指示、3日3晩でできたので「1夜街道」、夜間工事で提灯を下げたので「提灯街道」ともいう。
- ② 元和元年の宿泊は家康、秀忠父子が利勝らを同道、側室3人、女中18人、足軽50人を従えたとされる。彼女同伴とはなんとも優雅だが、意外とこじんまり？ たかがお遊びされど鷹狩り。軍事訓練や情報収集も。家康は狩り好きで関東全域を駆け巡った。
- ③ 敷地面積1町6反（明治の測量は4町とする）、周囲を土塁、空堀でめぐらせた陣屋造りだが、詳細は未解明。同時に作られた千葉の茶屋御殿は土塁、空堀などがほぼ完全に現存している。
- ④ 家康、秀忠のころ東金鷹狩りも頻繁に行われたが、家光ころからなくなり4代家綱の寛文年間に廃止されたらしい。跡地は大神宮に下賜され、明治まで大半が畑となった。
- ⑤ 江戸中期の正徳ころ、跡地一角に徳川家康を奉る東照宮を建立。

9) 「しべえしべえ」と八兵衛さん、船橋宿が繁栄

- ① 船橋宿は隣接した五日市村、九日市村、海神村3村の総称だが、宿は通称で、正式には幕府道中奉行の支配外の継立て村といった。房総、常陸4か国の要衝で人足15人、馬15匹を常備して参勤交代の荷役など継ぎ立て業務を行った。経費は3村と近郷村々が助郷した。
- ② 船橋宿の中心は九日市村で橋戸、中宿、三丁目、二丁目、一丁目などの小字に分かれた。村高673石、人口は505軒、2,381人、6割が漁師を兼ねた。商売ははたご22軒、荒物17軒、八百屋4軒、穀商4軒、豆腐4軒など合計80軒、船大工などの職人11人、馬32匹であった。（寛政12年）
- ③ 宿の中心は参勤交代の大名が休泊する本陣と継ぎ立て問屋場、ともに街道に面した九日市村に置かれたが「船橋戦争」で焼失、跡地は伝わっていない。
- ④ 旧道中ほどにむかしながらのたたずまいの旧家が向かい合う。ひろせ直船堂と森田呉服店、ともに江戸時代からの旧家で、店の造り、看板や2階の格子窓、太い梁、蔵などレトロな雰囲気止める。
- ⑤ 船橋宿ではたごを許可されたのは九日市村だけ。株仲間（利権組織）で新規の営業は認められなかった。はたごは遊女（飯盛女）をかかえ、執拗な客引きが有名だった。船橋の遊女は「し（四）べえ、し（四）べえ」というので「八べえ」とも言った。
- ⑥ 船橋は明治維新後も夜の町が存続、戦後の昭和40年代にようやく廃止された。

10) 通算10回も泊った明治天皇行在（あんざい）所跡

- ① 明治天皇は維新後、近代国家形成に尽力されたが、千葉県へも明治6年から45年まで10回のべ35日にわたって来県された。明治6年4月最初のおでましの時、船橋宿の旅館桜屋山口宅に昼食、以後、宿泊10回、昼食5回、休息2回を数えた。
- ② 昭和23年明治天皇に関する遺跡が解除されたが船橋行在所だけが継続指定となった。

11) JR船橋駅で解散

以上 ↓ 森田呉服店



↑ 大正時代の船橋



↑ 船橋



↑ 稲荷神社

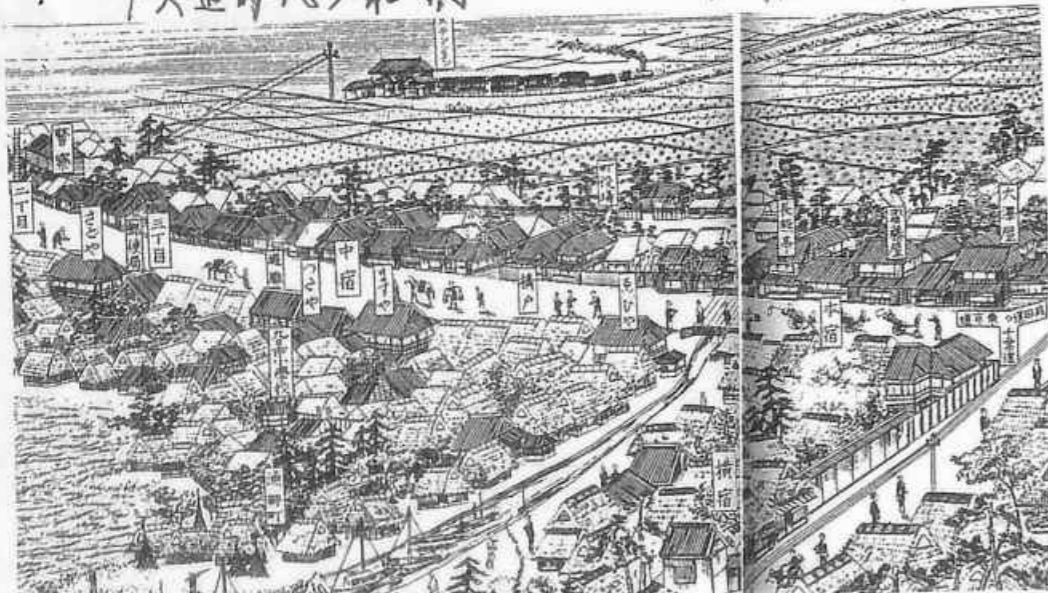


↑ 旧船問屋通り

→ 明治天皇行在所



↑ 明治天皇行在所 ↓ 戦後40年代の船橋駅前



明治中期、船橋宿



↑ 東照宮



船橋御殿跡と東照宮

